

『デイド・ペルスヴァル』

へユルバンと危険な浅瀬の挿話における「馬」

横山安由美

へユルバンと危険な浅瀬

ものの本によれば、ペルスヴァルはその騎士「Biaus Mauvais」と別れ、長い間荒野をさまよい、いろいろな城を訪れたが、祖父「漁夫王」の館を見つけることはできなかった。多くの冒険にも出会ったが、ある日大きな森を馬で駆け抜けてゆくと、この世で最も美しい草原に出た。その草原のとなりにはたいそう美しい浅瀬があり、浅瀬のほとりにはテントが張ってあった。ペルスヴァルは足早に浅瀬に近づき、入ろうとした。馬に水を飲ませたかったからだ。その途端、たいそう豪華な武具を身につけた騎士がテントから飛び出し、つかつかとペルスヴァルに駆け寄ると叫んだ、「神かけて、騎士殿、ここに立ち入るとは不届き千万。浅瀬に入ったことは高くつくと思し召せ。」そしてペルスヴァルに襲いかかり、槍を振り下ろそうとしたのだが、よく見るとペルスヴァルは槍も楯も持っていない。というのも彼は先刻戦った相手の騎士に武器を取られてしまったからだ。すると男は駆け戻り、テントの入り口にいる侍女に向かって、中に掛けてある槍と楯を持ってくるように命じた。楯も持

たない相手と戦うのは騎士の恥だと思ったからだ。命令通りに侍女が武器を取ってきてペルスヴァルに手渡したので、ペルスヴァルも内心ほっとした。浅瀬の騎士は改めて彼に、許しなく浅瀬に入るとは不届き千万、いざ尋常に勝負しろと叫び、一泡吹かせてやろうと身構えた。そこで二人はたいへん激しくぶつかり合い、たいへん激しく撃ち合った。双方の槍が折れて飛び散ると同時に、ペルスヴァルが相手に痛烈な一打を加えたので、騎士は落馬し、草原にどさっと倒れた。そのはずみに留め紐が切れ、騎士の頭から兜が飛ばされた。そこでペルスヴァルも馬から下りて地面に足をつけた。徒歩の人間を馬上から襲うのは恥だと思ったからだ。彼は騎士に剣で襲いかかり、何度も打撃を与えたので、ついに勝利した。騎士は命乞いをし、服従を誓った。しかしペルスヴァルは、なぜお前は浅瀬で馬に水を飲ませることを阻止し、騎士たちに襲いかかっては危害を加えるのか、そのわけを話さないかぎり、慈悲など与えてなるものか、と言った。すると騎士は言った、「殿、それならばお話しいたしましょう。

私はユルバンという名で、ノワール・エピヌ「黒棘」の女王の息子です。カーデュエルの宮廷でアーサー王に騎士に叙任していただきました。騎士になってからというもの、国中をまわり、多くの騎士たちに出会っては戦いを挑んでおりました。そして実に、武力で私に優る相手は誰一人としていなかったのです。冒険に導かれるままに馬で旅していると、ある夜大雨になり、雷鳴がとどろいてピカッと稲妻が走りまわりました。ものすごい光り方だったので、生きた心地もしませんでした。私は悪魔に取りつかれたかのように、めくらめっぽうに走りました。すると馬がたいそう怯え、私には御しきれなくなり、勝手に走り出してしまったのです。そして背後では大音響が響き、後ろの木々が「雷で」裂けてしまったのではないかと思われるほどでした。どうしたものかと途方にくれていると、これまで見たこともないような驟馬に乗った乙女が突如目の前に現れ、全速力で走っています。それに気づいた私は、後を追ってなんとか乙女をつかまえようと思いました。しかし空が稲光る他は真つ暗な夜で、

その姿を追うのは並大抵のことではありませんでした。なんとか後を追ううちに、乙女はこの世で最も立派な城の一つに入り、私もその後に行きました。乙女は大広間に入り、私もそうしました。城内で私の姿に気づいた乙女は、つかつかとやって来て私を抱擁し、私の武器を脱がせると、その夜はたいそう立派に私に奉仕してくれたのです。私は勇気を出して彼女を受け入れ、愛しました。そして彼女にも愛を求めたところ、一つだけ約束をしていただければ喜んであなたを愛しましょう、との返事でした。お望みとあらばどんなことでもいたしましたし、と私が言うと、恋人になる条件は私が彼女と共にずっと留まり、他へ行かないことなのです、と言われました。お心のままにしたいところです、でも騎士道を放棄するのは非常にづらいことですよ、と私が言うと、彼女はこう答えました。「あなた、あそこに浅瀬がありましたよ。そこにテントをお張り下さいな。どんな騎士が土地を通りかかっても、テントだけが目に見えて城は見えないのですよ。そして浅瀬に来て馬に水を飲ませようとする騎士たちに戦いを挑まれては？ そうすれば私との喜びも得られるし、騎士の道を維持することもできましますよ。」私はこれに同意し、乙女と共にその浅瀬で一年近くを過ごしたのです。それ以来、全てを手に入れることができたのです。今ご覧のテントの隣には本当は城が建っているのですが、私と乙女とお付きの侍女たちにしか見えないのです。あと八日でちょうど一年目だったのです。あと八日経ちさえすれば、私はこの世で最高の騎士になっていたところだったのですよ。しかし神が許して下さいませんでした。今や私は、生かすも殺すもあなたのご命令次第です。今度はあなたがここに残って一年間浅瀬を守られてはいかがでしょう。一年間ここに留まって一度も他人に負けることがなければ、この世の誉れが得られるのですよ。」

これを聞いたペルスヴァルは答えた、「友よ、ここに留まるつもりは毛頭無い。あなたにも浅瀬を離れて欲しいし、ここを通りかかる他の騎士にも今後危害が加えられないようにしなくてはならない。」すると騎士は答えた、「御意のままにいたしましょう。あなたが私よりも上だということがよくわかりましたから。」こうして、この「危

険な浅瀬」をもう守ることのないようにとペルスヴァルが騎士に諭していると、突如大音響が鳴り響き、森全体が深淵に飲み込まれたかのようだった。そして大音響の中から一陣の煙が立ち昇ると共に、あたりが暗闇に包まれた。半里進んでも他人の姿が目に入らないほどだった。この暗闇の中からたいそう大きく、たいそう苦しげな声が響いた。「ペルスヴァルよ、我ら乙女たちに対して何ということをしてかしてくれたのか。お前は今日我々に、いまだかつて味わったことのないような最大の苦しみを与えたのですよ。その酬いを覚悟なさい。」そう言うのと、次に声はペルスヴァルの傍らにいる騎士に向かって、早く立ち去るよう命じた、「これ以上そこにいると、私を失うのですよ」。この声を聞いた騎士は仰天し、ペルスヴァルのところに行つて、どうかお情けを、と百度以上も叫んだ。騎士が必死に慈悲を乞うのを見て驚いたペルスヴァルは、なぜそんなに一生懸命に自分に慈悲を求めのかを尋ねたが、騎士はこう答えるばかりだった、「ああ、殿よ、どうか、私においとまを下さい、とにかく立ち去らせて下さい。」ペルスヴァルは口を噤み、謎の聲に驚き呆れていた。騎士は自分の馬に駆け寄り、飛び乗ろうとしたが、ペルスヴァルは彼の鎖帷子の裾をつかんで言った、「騎士殿、どうか、そんな風に私から逃げないでくれ。」

それを聞いた騎士はびくつと震え、彼の方を向くと、どうか自分を引き止めないでほしい、これ以上ここにいたら死んでしまう、そう言つてまた何度も彼に慈悲を乞い願つた。その時また声があった、「急いで、ユルバン、でないとなあなたは永劫に私を失うのですよ！」これを聞いた騎士はついに気絶してしまつた。ペルスヴァルは驚き呆れて騎士を見守るばかりであつた。するとそのとき、ペルスヴァルの周りに鳥の大群が押し寄せて空を覆つたので、あたりは真つ暗になつてしまつた。鳥たちが兜の周りに群がり、隙間から目玉をえぐり出そうとするので、ペルスヴァルはぞつとした。このとき騎士が気絶から醒め、ペルスヴァルが鳥たちに襲われているのを見るや否や飛び上がり、有頂天になつて高らかに笑い出した。「ざまあみろ！」そして楯を装備し、剣を手に取ると、ペル

スヴァルめがけて突撃してきた。これを見たペルスヴァルは大いに怒って言った、「騎士殿、「いったん降伏したというのに」また一戦交えようというのか?」「その通り」と騎士は答える。そこで二人は抜き身の剣で互いに激しく撃ち合ったが、ペルスヴァルには分がなかった。というのも鳥が彼をひっぱり、あっという間に地面に倒されてしまったからだ。しかし怒り狂ったペルスヴァルは右の拳に握った剣で、彼にぴったりと取りついて一羽の鳥の体を突いたので、内臓が飛び出し、鳥は地面に落ちた。落ちながら、鳥の姿は一人の死せる乙女に変わった。それは、いまだかつて見たこともないような最高に美しい顔立ちの娘であった。いたいけな乙女の死を目にして、ペルスヴァルは胸のつぶれる思いだった。そして彼の周りにたかっていた鳥たちはすつと離れると、乙女の遺体を取り囲み、空へと運び去った。やれやれ助かったと思ったペルスヴァルは、騎士の方へ駆け寄った。騎士は彼に慈悲を乞い、どうか殺さないで下さいと頼んだ。ペルスヴァルは答えた、「それならば私が目にした不思議な事象はいつたい何なのか、全て話して聞かせることだ。」男は答えた、「殿、喜んで申し上げましょう。」

お聞きになった大音響や喧噪は、私の恋人が私を憐んで城を打ち壊した時の音なのです。お聞きになった声は、彼女が私に呼びかけていた声です。しかし私があるから逃げられそうにないのを見ると、彼女と侍女たちは鳥に姿を変え、あなたを襲い、私を助けにやってきたのです。援軍を見た私は奮い立ち、彼女たちを助け、あなたを殺そうとしました。だが今となっては、誰もあなたを打ち負かすことはできず、あなたが神に仕える勇士、この世で最高の騎士の一人だということがよくわかりました。あなたが傷つけた乙女は、私の恋人の妹でした。今頃彼女はアヴァロンにいて、安らかに眠っていることでしょう。神かけて、お願いします。まだ私を待っていてくれる恋人のところへどうか行かせて下さい。」ペルスヴァルはそれを聞くと笑い出し、快く許してやった。それを聞いた騎士は大喜びし、徒歩で足早に去っていった。というのも、ペルスヴァルから立ち去る許可をもらったことがあまりにうれしくて、馬のことなど思い出しもしなかったからである。男がペルスヴァルから二アルパン

「面積の単位」も離れないうちに、ペルスヴァルがふとあたりを見ると、この世の最高の喜びに浸っている男の姿があった。ペルスヴァルは自分の馬のところに行き、飛び乗った。彼らがペルスヴァルを待っているのではないかとも思ったが、馬に乗った途端、乙女たちの姿も、男の姿も、そして男の横にいたはずの馬の姿も消えていた。それを見たペルスヴァルは、不思議なこともあるものだと思ったが、馬の向きを変え、たぶん自分の頭がおかしかったのだろう、と独りごちた。

Didot Perceval (ms. E), ll. 966-1114 ⁽¹⁾

以上はウィリアム・ローチ校訂『ディド・ペルスヴァル』の中の「エピソードH」、通称「ユルバンと危険な浅瀬」部分の拙訳である。⁽²⁾『ディド・ペルスヴァル』は十三世紀前半に古フランス語で書かれた作者不詳の散文の聖杯物語の一つであり、主な粗筋はクレチアン・ド・トロワの『ペルスヴァル』とロベール・ド・ボロンの『聖杯由来の物語』などから来ている。中心になるのは主人公ペルスヴァルによる聖杯探求の経緯であるが、他の聖杯物語と同様、その中に無数のサブストーリーを含んでいる。ディド写本(D写本)とモテナ写本(E写本)と呼ばれる二つの写本が現存しており、前者の名前を取って物語自体が『ディド・ペルスヴァル』と呼ばれている。訳出したのはE写本であるが、適宜D写本も参照している。

この挿話を要約すると、「浅瀬の乙女」に恋した騎士ユルバンは浅瀬に来る騎士たちに試合を挑み続けるが、ペルスヴァルに打ち負かされることにより、乙女の魔法がとけ、二人の恋人はどこかへ消えてしまうというものである。鳥への変身や不可視の城などの「驚異的な事象」(Les merveilleux)は、ケルトの色彩の濃い「ブルターニュもの」(Les matières de Bretagne)に登場する特徴的な要素である。「浅瀬の乙女」は妖精に類した存在であり、魔法の術を使う。また、ペルスヴァルに殺された乙女の妹は、アーサー王伝説の想像上の地名アヴァロンに眠っているとあることから、

「浅瀬の乙女」はそこに住むと言われている妖精モルガンと同一視される。

ウェールズの古い伝承では、ユリアン (Urian) なる若者が浅瀬で「洗濯の乙女」に出会う。この乙女は、自分はキリスト教徒と一子をもうけるまで永遠に浅瀬で洗い続けなければならぬ運命であると語り、若者と乙女は恋に落ちる。二人の間に生まれたのが、後に強力な戦士として知られるオーウェン (Owain) だったという。このように、同じく浅瀬を舞台とする伝承を探し出し、たとえばユルバンとユリアン、「浅瀬の乙女」と「洗濯の乙女」がどの程度同一視できるかといったことを問うてゆくのが、アメリカなどで行われた古典的な中世文学研究の形であった。しかし、こうした立場で『ディド』の「浅瀬」の伝説的な典拠を探し求めた R・S・ルーミスも、研究論文の冒頭で次のように言っている。

アーサー王物語の読者は、やがて自分が万華鏡を回している子供のような気持ちになってくる。魅惑的な模様が次から次へと現れるが、模様を形作っているカラーのガラス片はいつも同じものなのだ。この単調さや、同じシチュエーションやモチーフの再利用、これをどう説明したらよいのだろうか？⁽³⁾

確かにこの挿話も小気味がよい話ではない。そのまま読んでも、究極の勝者は誰だったのか、ペルスヴァルとユルバンはどちらが幸せだったのか、よくわからない。また聖杯との邂逅を求めるペルスヴァル個人の冒険にはほとんど影響を及ぼさない話でもある。よしんば個々のモチーフの神話上の起源を探し出せたとしても、こうした印象が解消されることはない。

ところでこの挿話には、馬に関する言及が実にたくさん登場する。そこでこの物語を馬と、馬に象徴される騎士道の表象のドラマと見て、馬の具体的な利用の様態を観察してみてもどうだろうか。それによってもう少し面白くこの挿話を読むことができはしないだろうか。

中世ヨーロッパの騎士にとって、馬はそのアイデンティティーを保證する重要な存在であった。「騎士」(chevalier)

という単語は「馬」(cheval)から来ている。馬は、移動や戦いの手段としての実用的な価値ばかりではなく、象徴的にも中世文化の中で大きな役割を果たしていた。十三世紀のレイモン・リュル著『騎士道の書』によれば、馬は全ての獣の中で、最も高貴で、最も人間に従順である。騎士が乗馬し、人よりも高い目線に位置するということは、彼がより多くの人から見られ、より多くのものを征服するに値する優れた存在であることの象徴である。もし騎士が臆病風に吹かれて卑怯なまねをしたとしても、馬は理性をもたない獣ではあるが、騎士よりもより良く騎士道の規範と義務に従い、騎士を導くことだろう。⁽⁴⁾

馬とユルバン

物語を時間順に見ていこう。本稿末の〈ヘストリーと「馬」の対照表〉も参照されたい。

ユルバンが冒頭で出会った雷は、彼が合理的な日常から驚異的な世界へと移行するための一つのショックである。彼は「悪魔に取りつかれたかのように」走り出し、またD写本では「天が裂けたかのような」悪天候と表現されており、これが天上と地上という常識的な区分からの逸脱の瞬間であることがわかる。その時、馬が恐怖のあまり制御不能になる。これは情景の激しさを描写するばかりでなく、その後の騎士の運命と深い関わりをもっている。前述通り、馬は騎士にとって最も重要なアイテムの一つであり、正しき騎士の道へと人間をいざなう誠実な乗り物でもあった。にもかかわらずここでは優秀な騎士が馬を制御できなくなる。これは彼が、いずれ騎士としてのアイデンティティを脅かされる運命に至ることの暗示ではないのか。

ユルバンは、雷雨の中に突然現れた乙女の驟馬を追って走ることが精いっぱいであった。か弱い乙女の乗る驟馬の後ろを騎士の乗る馬が走り、城に着くまで追いつけない。現実が逆転している。D写本では驟馬でなく儀仗馬とあり、いずれにしても女性の典型的な乗り物である。通常またがるのではなく、足を揃えて横がけして乗るので、あまり

スピードは出ない。行進や儀式の場面で、貴婦人が美しく着飾ってゆったりと走るのだ。それなのにこの場面では乙女が、しかも暗闇と雷雨の中、全力疾走して騎士を導く。

城で乙女に歓待された騎士は、ただちに彼女に惚れる。彼女の魔力に屈服し、どんな条件でも受け入れることを誓ってしまう。その条件とは、彼女と共に永久にそこに留まることであった。表面的には愛する者と共に過ごしたいという心理の表現ととれるが、その背後にはユルバンを騎士道から引き離そうとするある種の意図が存し、それをユルバン自身もうつすらと感じとっている。「騎士道を放棄するのは非常につらいことですよ」と答えているからだ。乙女は彼を自分の世界に取り込もうとしている。しかし国々を旅しないことは、遍歴を生業とする騎士にとっては存在理由を脅かされる条件なのである。宮廷から旅立ち、様々な冒険を通して腕を磨き、経験を積まなくてはならない。そして宮廷に帰還して初めて、自分が評価されるのである。とりわけ中世の「宮廷風騎士道小説」(romans courtois)では、騎士たちが宮廷から出発し、宮廷に帰還することそれ自体が物語の時間軸を構成しており、一つところに留まることは、たとえそれが大きく立派な城館であっても、騎士としての欠格と物語の破綻を意味している。これは、エニードと結婚したエレックが、新婚夫婦の愛の生活に夢中になるあまり、館にこもり、武勲の腕を磨くことがなくなってしまうことから罰せられ、放浪の旅に出ることを余儀なくされた、というクレチアン・ド・トロワの『エレックとエニード』に典型的に表れている。

しかしユルバンは簡単には騎士道を放棄できない真面目な騎士である。そこで乙女が申し出たのは、浅瀬に来る騎士たちに試合を挑むことであった。こうすれば彼の武勲の鍛錬にもなるし、愛の生活を維持することもできる。そして、一年間誰にも打ち負かされることがなければ、この世で最高の騎士の誉れが得られるのだと言われる。ユルバンの言う「それ以来、全てを手に入れることができたのです」とは武勲、愛、そして富などを指している。富といえば、乙女と共に住む城は「この世で最も立派な城の一つ」であり、ペルスヴァルの前に現れた瞬間のユルバンは「たいそ

う豪華な武具を身にまとつていたことを思い出されたい。

豪華な装備で騎士たちに挑むユルバンは、いささか奇妙な恋人との生活を除けば、一応満ち足りた騎士としての生活を送っていた。少なくとも本人はそう思っていた。しかしペルスヴァルとの出会い以来、これが徐々に脅かされてゆく。

ユルバンの馬の乗り降りに着目してみよう。挿話の冒頭で二人が出会うとき、二人は共に馬上の人である。つまり互いに騎士として出会い、騎士として対決する。浅瀬の試合は馬上の槍試合の形態で提示されている。しかしペルスヴァルの一撃で彼は落馬し、敗北する。敗者ユルバンは、新たな主人としてペルスヴァルを認めることによって、また騎士としての生活を再開するはずであった。彼もそれを望んでいた。

しかしペルスヴァルに完敗し、服従を誓った時のこと、そうはさせるものかと乙女の声が「早くそこを立ち去れ」と命令する。馬への復帰の試みはこの時なされている。ユルバンは「自分の馬に駆け寄り、飛び乗ろうとした」が、ペルスヴァルに鎖帷子の裾を掴まれ、飛び乗れない。フランス語における馬に関わる慣用句は数多いが、「馬に乗る」(monter à cheval)は乗馬の行為を指すばかりでなく、しばしば「馬に乗ることを習得する」、「乗馬するにふさわしい身分、経験を体得する」ことも意味する。すると、ユルバンがペルスヴァルによって乗馬を阻止されたのは、浅瀬で侵入者に挑むだけという特殊な騎士道への復帰を拒否されたこととらえることもできる。そして事実、あの落馬の瞬間以来、ユルバンは二度と馬に乗ることはなかったのである。

鳥の大群が現れた後の、ユルバンのペルスヴァルへの二度目の挑戦の際には、二人は徒歩の状態で剣を抜き合う。その結果、ここでもペルスヴァルが勝利する。だがユルバンはもはやペルスヴァルに臣従を誓わず、恋人のもとへ立ち去る許可を求めている。許可を得た男は、一度目のように馬に乗って去ろうとはしない。「大喜びし、徒歩で足早に去っていった。というのも、ペルスヴァルから立ち去る許可をもらったことがあまりにうれしくて、馬のことなど思

い出しもしなかったからである。」馬の放棄と臣従の放棄、この二点は、ユルバンが騎士という身分を放棄したことを二重に意味している。そして男が感じた「この世の最高の喜び」は、騎士道という幻想の中での生活ではなくて、純粹な愛の世界に旅立つことがここで晴れて決定されたことを理解したがゆえの喜びなのではなかっただろうか。

同じく聖杯探求の物語であるヴォーシエ・ド・ドゥナンの『第二続編』にも、「危険な浅瀬」を舞台とする類似した挿話が採録されている。しかしそこでは、「白の騎士」と呼ばれるユルバンに対応する騎士は、ペルスヴァルに敗北したのち、ペルスヴァルの助言通りにアーサー王の宮廷に行き、通常の騎士としての生活に復帰する。典拠となった伝説は同一であったとしても、結末としては対照的である。

幻想の騎士道

騎士道と恋愛の両立不可能がこの物語の主題として選ばれていることは明らかである。ユルバンという騎士について見るならば、彼は最も真摯で最も恵まれた騎士の一人であったことがわかる。ノワール・エピヌの女王の息子、つまり家柄も良く、アーサー王に叙任された騎士であり、しかもこれまで負け知らずの実力者である。その彼が乙女への盲目的な愛に至るプロセスは、その美しさに惹かれたとか、言葉を交わしたとかいった通常のきっかけとは相違している。最初の出会いは雷雨の中の騎行においてであり、城に着くと乙女は突然ユルバンの武具を脱がせ、愛の奉仕を始める。交わした言葉は全く記されていない。馬上で彼の気を引き、そして次に城という舞台で彼に接近する。馬、城、試合、といった封建社会の諸要素を使用しての段階的な取り込みが、いわく乙女がユルバンに仕掛けた綿密な罠なのである。

しかし彼はそれに気づいていない。冒頭で、たまたま武器を携帯していなかったペルスヴァルに対して楯と槍を与えて対等な条件で試合を挑もうとするところなどは、半ば幻影の世界に生きつつも、ユルバン本人は真剣に騎士道精

神を尊んでいることが見てとれ、それが物語を受容する側の哀愁を誘う。もしペルスヴァルに武器など与えずに一氣に倒していれば、「騎士」として幸福に魔法の世界に生き続けることができたのに、と。

乙女が彼に提供した世界はどこまで現実のものだったのだろうか。馬に優る騾馬が現実にはあり得ないのなら、そうした馬に乗って敵に挑むユルバンの騎士道自体、あやうくはないか。馬が幻影であるなら、城も実在のものではない。というのも、この城はユルバンと乙女にしか見えない。また、ユルバンがペルスヴァルに負け、いったん彼に臣従を誓った瞬間、「突如大音響が鳴り響き、森全体が深淵に飲み込まれたかのような音だった。」そしてそれは彼の「恋人が私」「ユルバン」を儚んで城を打ち壊した時の音なのです。「この建物は、恋人を捨てて、真の騎士道に復帰することをユルバンが誓った瞬間に崩壊する、そういう「城」だったのである。また、城は浅瀬のほとりのテントの横に建っているはずだが、一般の人間には浅瀬とテントしか見えない。普段のユルバンは幻想の城の中に乙女と共に住みながら、浅瀬に侵入者が立ち入った場合にのみ、テントから姿を現すことになる。テントはといえば、魔法界と現実界の中継地点として機能している。テント係の侍女が一人いて、武器が壁にかけてあり、一応現実の騎士社会に対して「開かれて」いるのだ。

「異界」(l'Autre Monde)という概念は、様々な神話に登場する。多くの伝承においては、異界は果てしない航海の果てにたどり着く遠方の地、あるいは海の底などにある。しかしながらフランスの宮廷風騎士道小説に影響を与えたケルト人の異界はもっと身近なところに設定されていた。たとえばイギリスのコーンウォールには、中央に穴のあいた巨石が立っている。この穴に生まれたばかりの赤ん坊を通してやると彼は健康で幸せな一生を送ると言い伝えられ、現在でも母親が子供を連れてやってくるそうだ。胎内への入り口とも見えるこの穴は、ケルト人たちにとっては異界の入り口であった。赤子を穴に通すということは、いったん子供を黄泉の世界に送り込み、また取り返すことによつて、本当の死や病苦を避けられるといった異界信仰によるものであったと言われる。

ケルトの異界は、とりわけ沼の中、裏庭の井戸の中など「水」のあるところに入り口が多い。この挿話の「浅瀬」も、とある草原を越えたところにある水場であり、しばしば旅人が通りかかる場所である。「地続き」の異界は、言い換えれば日常的な行き来が可能なことでも特徴づけられ、ユルバンは、城・テント・浅瀬というトポロジの中で魔法界と現実とを自由に往来していたのである。

こう考えると、騎士道と恋愛の間のユルバンの葛藤は、近代文学において行われるような心理描写や苦悩のセリフを通してではなくて、馬や城といった舞台装置における人物の往来や行動を通して表現されているのだということがわかってくる。たとえば、ユルバンがペルスヴァルに服従し、世間に復帰しようとした時、乙女はそこに現れて恋人を説得するのではない。声として現れ、とにかく「そこから離れる」ことを求める。「そこ」とは、ペルスヴァルによって導かれるであろう現実の騎士社会であり、それに対し乙女は声を空に響かせることによって、姿なき異形の命として彼を支配しようと試みたのである。声は「早く、早く」とユルバンをせき立てる。ユルバンは、あせり、叫び、気絶する。オペラのクライマックスのように仕立てられたこの場面は、この物語の性格をよく表している。

さらに巧みなのは、挿話の閉幕それ自体も「馬」によってなされている点である。ユルバンが「馬を忘れる」ばかりではない。冒険が終わってペルスヴァルが自分の「馬に乗った途端、乙女たちの姿も、男の姿も、そして男の横にいたはずの馬の姿も消えていた。」つまりペルスヴァルの乗馬は浅瀬のまやかしの世界との訣別であり、それまで見えていたユルバンの馬、ひいては彼の騎士道自体が一つの大きな幻影であったことが最後に露呈されて終わる。「不思議なこともあるものだ」と、ペルスヴァルはいつときこの世界への関心を示すかに見えたが、「馬の向きを変え」ることによって執着は断ち切られ、全ては彼自身の狂気 (folie) のなせるわざとして忘却されてゆくのである。

一見味気なく見える「危険な浅瀬」の挿話も、それぞれの単語が象徴し、意味するところのものを把握してみると、緻密に組み立てられたイデオロジカルなドラマだということが見えてくる。西洋中世はふんだんに象徴の技法や慣用

表現（トポス）を利用した。個々の単語の指示する定型的なイメージを的確に把握して、重なり合ったり対立しあったりするイメージとイメージの動的な関わりを読み解くことが、中世文学の受容の愉しみなのである。

異界の敵意

そこで最後の問題点となるのは、〈現実と異界〉という対比構造の中に〈騎士道と恋愛〉というアンチテーゼを組み込むことで、この挿話が何を言わんとしているのかということである。確かに騎士道と恋愛の対立という主題は中世文学のいたるところに登場する。政略結婚を基本とする封建社会では、配偶者が恋の対象となることはありえず、男女は必然的に不倫の関係に入った。トリスタンの愛したイズーは主君マルク王の王妃、騎士の華ランスロが愛したグニエーヴルはアーサー王の王妃であった。彼らが愛を貫くことはとりもなおさず主君への反逆であり、封建社会の存立を危うくする犯罪行為だったのである。こうした葛藤が、クレチアン・ド・トロワの小説や、『散文ランスロ』と呼ばれるアーサー王物語群においては見事に描かれている。しかしこの『デイド』の挿話にはあてはまらない。そもそもユルバンの恋する乙女は独身であり、主君への反逆等々の問題は生じない。そこにあるのは、異界に住む乙女の側の、騎士道という現実界に対する、絶対的な敵意だけなのである。乙女はユルバンに惚れたのではなく、その敵意を実現するために純粹で真面目な騎士ユルバンを引っかけた、としか読めないのである。

乙女とユルバンの精神的な関わりが希薄であるとしたら、この物語はもう一人の登場人物ペルスヴァル、つまり『デイド』の主人公との関係でとらえなくてはならない。彼はこの挿話の中では事件の目撃者として機能している。ユルバンの希有の体験も、最終的な選択も、ペルスヴァルに対して語られ、彼に見られることよってのみ、後世に伝えられる。他の挿話についても同様で、ペルスヴァルがそれに参与し、全体の中に統合されて初めて聖杯探求の長大な歴史の一ページたりうるのである。

さらにここでペルスヴァルは重要な役割を果たしている。ユルバンを倒したり、鳥を殺したりすることは、何よりも彼の絶対的な強さの証明なのである。冒頭でユルバンは「武力で私に優る相手は誰一人としていなかった」と豪語した。そして浅瀬で一年間侵入者に挑み続けることで、この世の最高の騎士という称号が得られると信じている。それは乙女の用いたまやかしにすぎないのだが、たまたまユルバンを倒したペルスヴァルが、物語世界の中では名実共に「この世で最高の騎士」であったため、浅瀬の勝者はこの世で最高の騎士という乙女の虚言が現実化される、という仕組みになっている。つまり俗世の騎士の価値や順位を魔法の力で恣意的に決定し、支配しようとする異界の側の意図や論理がペルスヴァルによって打倒されることにより、単なる魔法世界の論理を越えた上位の力なり世界なり、つまりキリスト教的な全能者が存在することを作者は知らしめようとしているのである。

『デイド・ペルスヴァル』の特徴はここにある。これまでの宮廷風騎士道小説は驚異的なものを物語の最大の面白味として活用し、中心に位置づけてきた。ケルト文化が早い時期からキリスト教と融合し、封建社会に自然に入り込んだことも、それを利している。宮廷風騎士道小説の中でも比較の後期に栄えた聖杯物語群においては、聖杯それ自体はキリスト教の祭儀や聖体の奇跡になぞらえた形で描かれたが、その周辺の場面の描写にはやはり驚異的な要素が駆使された。たとえば『聖杯の探索』のクライマックスでは、ガラアド、ペルスヴァル、ボオールの三人の選ばれた騎士たちが漕ぎ手のいない魔法の舟に乗って旅立つ。その舟の中の銀のテーブルの上には聖杯が乗っていて、彼らの終焉への旅の伴侶となる。そして彼らは何日も海をさまよった後に、「地上のエルサレム」であるサラスなる虚構の町にたどり着くのであった。驚異的要素による脚色のおかげで、最後の旅路は神秘的かつ魅力的に描かれている。

しかし『デイド』はキリスト教にかかわる神秘や奇跡とそれ以外の魔法的な要素とを区別している。確かに物語の中にはたくさんの驚異的な事件が発生するが、いずれもこの「危険な浅瀬」の挿話と同様、魔法の呪縛が解かれ、舞台が現実に戻ることを目的として描かれる。ペルスヴァルの冒険を通して「あちらの世界」が済し崩し的に破壊され

てゆき、そして最後に彼が漁夫王の館にたどり着き、「この杯〔＝聖杯〕は誰に供するものなのか」というあの質問を発した途端、漁夫王は「病から癒え、魚のように元気に」なるのである(7.1840)。と同時に、この瞬間、「世界中でもろもろの魔法は解かれ、消滅した(7.1892)。」主人公ペルスヴァルの究極の役割は魔法の世界を終焉に導くことであった。

『デイド』における魔法は、消滅すべき存在であるばかりではなくて、漁夫王の怪我や国土の荒廃と並んで世界を病ませている「悪」であるとすら明言されている。ペルスヴァルが一度目の質問に失敗したとき、一人の娘は彼に言った。もし正しく質問していたならば、「今日ブルターニュの地にある様々な魔法や悪(malice)は無くなっていただろうに(7.1294-1295)。」しかも、騎士たちを誘惑し、墮落させる役割を、アヴァロンの妖精たち、つまり「女」に担わせることによって、他の物語ではアーサー王の永遠に憩う神聖なるアヴァロンをも「悪」の側に位置づけている。ただしデモニックで道徳的な悪というよりは、必要悪のようなものとして。作者は物語のモチーフとして様々な驚異的事象を描きつつも、究極的に神が提示する聖杯の神秘よりもそれらを下位に置く。いや、下位というよりも、こうした身近な様々な驚異的事象の克服にこそ、究極の神秘に到達する前段階があると見たのである。

『聖杯の探索』などの多くの聖杯物語では、信心深く純潔を守った騎士たちが神に選ばれ、究極の神秘を体験する。「神に仕える」騎士こそがこの世で最高の存在であるという理念を提唱しているのだ。それはテンプル騎士団など、修道士たちが武装し、聖地で戦うことがもてはやされた十字軍思想の直接の影響を受けている。驚異的事象も、キリスト教的な意味での奇跡も、こうした思想を脚色するために縦横無尽に使用される。本来祈りと瞑想を使命とする聖職者が他人の血を流すことの矛盾はそこでは無視されている。

しかし『デイド』は、「神に仕える騎士」像ではなくて、「アーサー王に仕える騎士」像を選択している。というのも、この作品はペルスヴァルによる質問の完成で物語が終わるのではない。ペルスヴァルは使命を終えた途端、騎士

の道を離れ、僧侶となって祈りと瞑想の世界に入り、物語の記録者となる。世界一の騎士であり、かつ最も純粹で善意に満ちた人物であったはずのペルスヴァルが俗世を去ることは、とりもなおさず、武力は神に任せ、天に至る手段たりえない、という『ディド』の思想の表明なのだ。

だが、魔法に立ち向かう「冒険」が世界から消滅し、聖杯の探求という目的が消滅した今、残された大多数の世俗の騎士たちは何をせよというのか。アーサー王と円卓の騎士たちに残された選択肢は、極めて現実的なものだった。つまり他国の征服による自国の拡大と発展であった。そこで物語の後半部分では、アーサー王と騎士たちがブリテンを離れ、フランスを征服し、ついでローマ帝国に戦いを挑む様が語られる。そして、もう少しでアーサーがローマを倒せるというその時に、甥のモルドレが反旗を翻し、急遽帰国したアーサーと国を二分する戦いをまみえなくてはならなかった。その結果、モルドレはアーサーに倒され、アーサーもまた彼の刃を受けて、死に至る。

この部分は、多くのアーサー王物語の源泉となったジェフリー・オヴ・モンマスの『ブリタニア王列伝』に沿ったものではあるが、『ディド』は物語を魔法の克服という前半と他国征服を年代記風に描く後半の二部構成にすることによって、より悲劇的な世界像を浮かび上がらせている。鳥に変身した人間やドラゴンなど、異形のものたちを倒し征服することは必要悪ではあっても、騎士が本来目的とする活動ではない。その一方で軍事力で他国を征服し、権力を拡大することは、結局のところ当事者双方の死や負傷を招き、幸福に至る過程ではありえない。十字軍活動を契機に当時神学の世界で——特に聖ベルナルドゥスなどによって——真剣に問われていた、騎士は神にのみ仕える存在か、俗世の王に仕える存在かといった本質的な問題がここで提示されているのだ。それは同時に、『ディド』の前半が描く騎士個人の鍛錬や騎馬試合をもって騎士道とするか、後半のように集団として戦争に参加することに本意ありとするのかという問題につながってくる。これらは、中世後期になるにつれて、騎馬試合の禁止、騎士の宮廷官僚化や傭兵の増加といった現実の社会問題として封建社会につきつけられてゆくのである。

そして現実の騎士道が矛盾に満ちた理念を抱えるのと同様に、中世封建社会を描く一連の物語作品もまた、極めて大きな矛盾を抱えていた。魔法と冒険の夢幻の世界を描くことを旨とすべきなのか、現実を視野においた真正な年代記をこそ描くべきなのか。多くの聖杯物語はアーサー王の誕生から死に至る展開をジェフリーらの年代記に負っており、現実世界から乖離した魔法物語をどこかで超えなくてはならなかった。そこで『デイド』の作者は、異界につながる浅瀬というモチーフを騎士道の問題と関係づけて再構成した。そうした工夫の跡を端的に物語っていたのが「馬」の用法ではなかったか。

浅瀬に来る騎士を拒むことは、ひとえに自分の騎士道の鍛錬である、とユルバンは思っていた。しかしながら、乙女はなぜ彼にそのような提案をしたのだろうか。浅瀬には、遍歴の騎士たちが「馬に水を飲ませ」に来るからである。つまり、馬に水を飲ませるのをユルバンに阻止させることによって、馬を殺し、ひいては騎士を殺す、そういう徹底した意図の中からこの挿話は生まれている。馬への悪意はクリスタルのように純粹で鋭い。騎士道に対する異界の悪意は、あるいは騎士道について真摯に問うことなくして驚異的な世界を利用し、習慣的に描き続けてきた宮廷風騎士道小説への敵意そのものではなかっただろうか。そう考えるとこの挿話は、退屈というよりも、何やらスリリングなものとして読めてくるのである。

へストーリーと「馬」の対照表

登場人物	「馬」
ユルバンとペルスヴァルの馬上での出会い ユルバン 雷雨 魔法の城 一度目の試合 敗北 乙女の声 (鳥の大群) 二度目の挑戦 敗北 ペルスヴァル 最後に乗馬	騎士の対決〔挿話の開始〕 馬の暴走 武装を解く 落馬 ペルスヴァルへの服従 乗馬を試み、阻止される 徒歩戦 馬の忘却 ユルバンと馬の消滅〔挿話の終了〕

(注)

(1) 傍点線部は、以下の論考に引用されている部分で、横山による。改段落はローチの校訂本にしたがっている。

- (2) William Roach (éd.), *The Didot Perceval*, pp.195-202, Slatkine, 1977
- (3) Roger Sherman Loomis, "The Combat at the Ford in the *Didot Perceval*", *Modern Philology*, 43, 1945, p.63
- (4) Raymond Lulle, *Livre de l'ordre de chevalerie*, p.23, 60, La Différence, 1991
- (5) cf. 横山安由美「聖杯と聖体祭儀―ロベール・ド・ボロン再考―」『紀要』第三十一号、フェリス女学院大学文学部、一九九六、四五頁―九八頁